北海道言語文化研究
No. 23, 73-83, 2025.
北海道言語研究会

台湾人日本語学習者のキャリア選択における意思決定要因についての一考察

坂本裕子・郭碧蘭

A Study on the Determinants of Career Decision-Making Among Taiwanese Students Majoring in Japanese

SAKAMOTO Yuko; Pi-lan KUO

要旨：本稿では、台湾人日本語学習者 3 名に対して、日本でのインターンシップを通じて、日本で就職するという意思を持つに至ったプロセスを複線径路・等至性モデル（TEM）を用いて分析し、その決定的な要因を明らかにすることを試みた。本研究では、TEM による分析を通して、インターンシップの効果や成果だけではなく、参加した学生の意思決定のプロセスと要因を明らかにすることができた。インターンシップに参加した学生は、高校進学時には消極的な理由で日本語を選択したものの、長期にわたる日本語学習を経て日本文化や生活への関心が深まり、長期間の日本滞在を選択する意欲が高まったこと、日本でのインターンシップを通して、自身の日本語力の不足を実感し、さらに日本語を学ぶ必要性を感じたこと、日本滞在中に母語で相談できる友人の存在がキャリア選択の要因として示唆された。今後は、さらに詳細な調査を行うとともに、留学経験者のキャリア選択についても研究を進めたい。

キーワード：台湾　日本語教育　インターンシップ　キャリア　異文化

1. はじめに

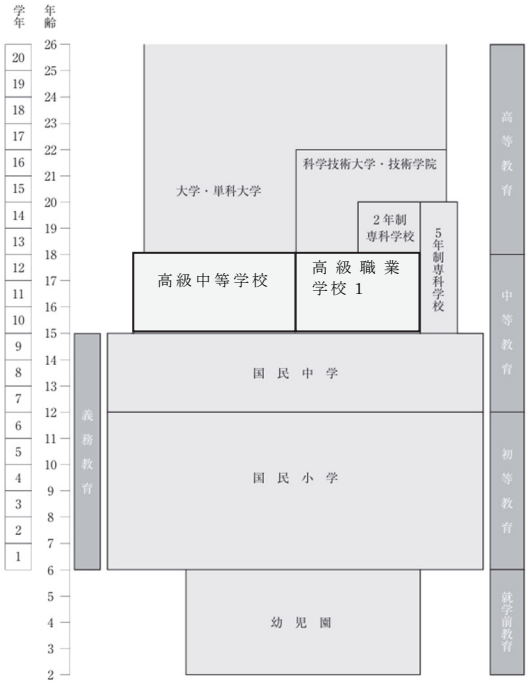
Covid-19 を経験した世界では、瞬時に世界の情報が得られるようになり、国境や海を越えた人的往来は以前にもまして盛んになっている。他方で、便利になったが故に、わざわざ海外に出向く必要性が薄れたとの見方もできる。日本では若年層の内的志向が指摘されるが、このことは日本に限ったことではなく、台湾の若年層にも共通する。日本旅行や 1 週間程度の短期日本研修は人気だが、長期間の海外渡航や海外での就職に関しては、依然として消極的な傾向が見受けられる。このような状況下にあって、長期間の日本滞在や日本での就職を選択する学生が一定数存在する。そのような学生たちは、な

ぜ長期間の日本滞在や日本での就職を決めたのか。

海外の日本語学習者の日本でのインターンシップは増加傾向にあり、学習者の日本理解を深めると同時に、日本における国際的友好関係維持にも重要な意義を持つ。本研究で対象とした台湾は、日本と歴史的・文化的に深い関係があり、日本語教育が盛んな地域のひとつであるが、近年は少子化や政府の英語バイリンガル政策の影響で、日本語学習者数が減少傾向にある（国際交流基金ウエブサイト）。一方で、日本は依然として台湾人学生の主要な留学先のひとつであり（台湾教育部ウエブサイト）、2007 年から始まった台湾教育部（日本の文部科学省に相当）による海外インターンシップ奨学金プログラムを背景に、日本でのインターンシップも増加している。

台湾における日本留学や日本でのインターンシップに関する研究では、その効果や成果についてまとめたものが多い。本研究では、大学で日本語を専攻する台湾人日本語学習者の日本でのインターンシップ参加や日本での就職に対する動機や意思決定のプロセスについて、複線径路・等至性モデル（Trajectory Equifinality Model：以下 TEM とすることがある）を用いて明らかにすることを試みる。

［図 1］台湾の教育制度



（出典：文部科学省（2017））

ここで、台湾の教育制度について触れておきたい。図 1 は文部科学省（2017）によるまとめである。台湾では、日本の小学校にあたる国民小学 6 年、前期中等教育として、日本の中学校にあたる国民中学 3 年が義務教育とされている。後期中等教育には、普通教育を行う高級中学と、職業・専門教育を行う高級職業学校が設置され、この 12 年間を基本教育としている。高等教育は、日本の大学にあたる大学、単科大学のほか、専門人

材の養成を行う科学技術大学（科技大学）や技術学院に加え、日本の高専と同様のしくみである五年制の専科学校や短大に相当する二年制の専科学校が設置されている。昨今の少子化の影響を受け、大学の統廃合が進み、科学技術大学や技術学院も大学という名称になっているが、その教育内容は、総合大学とは異なり、職業人材の養成のための職業訓練や実習が多く行われる。

台湾の教育制度の特徴として、後期中等教育段階で、職業・専門教育を受けることを選択した場合、大学に進学する際に選択できる専攻が限られることがあげられる。多くの場合、後期中等教育段階で選択した専門を高等教育段階でも継続して学ぶことを選択することになる。

2. 先行研究

株式会社 DISCO（2024）の調査報告によれば、日本の大学に在籍している日本人学生の約 9 割がインターンシップに参加しており、外国人留学生も約半数がインターンシップに参加している。日本のインターンシップの特徴に関して、亀野（2021）は、インターンシップ目的における「教育目的」と「就職・採用目的」という視点から、日本のインターンシップは、「教育目的」を重視しているものの、実態として、「就職・採用目的」が中心であること、また極端に期間が短いことを指摘する。実際のところ、文部科学省（2023）の調査によれば、大学生のインターンシップ期間は 2 日～2 週間程度が最も多く、3 か月以上のインターンシップに参加する学生は 1 割に満たないことが分かる。

台湾では、台湾教育部が 2007 年から大学生の海外派遣について、奨学金プログラムを展開し、海外留学、海外インターンシップを希望する学生に対し経済的な支援を行っている。台湾の大学の日本語専攻では、2015 年以降、科技大学を中心に日本でのインターンシップを制度化する機関が増加し、2019 年の日本政府のビザに関する政策変更により急増したものの、Covid-19 の影響で中断を余儀なくされ、2022 年秋から回復している。台湾の大学の日本語専攻で行われている日本でのインターンシップは、日本語学習者の日本理解を深めると同時に、日本と台湾の友好関係維持にも重要な意義を持つことから、日台双方で期待が高まっている。その一方で、日本の受入れ側の体制が整っていないこと、台湾の学生側に渡航前準備が不十分であることから問題が生じているケースが多発している。この課題をいかに解決するかについては、日本語教育の分野において様々な角度から取り組まれている。

戸川・内山（2019）は、日本語教育の視点から見たインターンシップによる学びは限定的であり、日本でのインターンシップは、もともとの日本語力の差を一層広げることになると指摘する。しかし、戸川（2020）では、インターンシップ参加学生たちは、少しでも多くのことを学ぼうとしており、日本語能力試験にはすぐ反映されないが、学生自身が日本語力の向上を実感していたと述べる。大重（2019）は、台湾の職業系大学と日本の短期大学のインターンシップを比較、考察した結果、共通することとして、社会

人基礎力では向上が見られるものの、コミュニケーション能力や個人の経済的環境の差から生じる機会獲得の差を指摘する。王（2019）は、台湾の海外研修制度を丁寧に調査、分析し、一部に不適応の学生が見られたものの、学生は自己探索、適職探索を通して、今後の進路決定に明白な目的意識を持つようになることをあげている。

いずれの研究も、インターンシップによる学びや効果についてまとめているが、そもそも、日本語を専攻するする学生がどのようなプロセスを経て、インターンシップ参加や日本での就職を選択したのかについては、明らかにされていない。人材が流動化する中で、優秀な人材をいかに獲得し、定着させるかは世界的な課題となっている。そこで、このことを明らかにすることは、日本語教育プログラム開発のみならず、産業界にとっても有益な知見となるのではないか。

3. 調査概要

3.1. 調査目的

本研究においては、台湾で日本語を専攻する大学生が、どのような経緯でインターンシップに参加し、その後、日本で就職することを決めたのか、そのプロセスを明らかにすることを目的として、縦断的に調査を行う。

3.2. 調査協力者

調査協力者は、台湾の同じ大学で日本語を専攻し、日本でも同じ企業でインターンシップを行った学生 3 名である。

［表 1］調査協力者

	学生 A	学生 B	学生 C
年齢	22 歳	22 歳	21 歳
性別	女性	女性	女性
出身地	A 市	A 市	A 市
母語	中国語	中国語	中国語
高校の専攻	日本語	日本語	日本語
大学の専攻	日本語	日本語	日本語
日本語学習期間	7 年	7 年	7 年
日本語能力試験	高校 2 年 N2 大学 4 年 N1	高校 2 年 N2 大学 4 年 N1	高校 2 年 N2 大学 3 年 N1
自覚する日本語力	N2 程度	N3 程度	N1 程度
海外渡航歴	無	無	有（タイ）

調査協力者 3 名が参加したインターンシップの概要は、以下のとおりである。

業種：ホテル・旅館業

期間：2022 年 9 月～2023 年 2 月（168 日間）
業務内容：温泉旅館での接客業務（フロント、配膳等）

調査協力者と筆者ら（教員 A、教員 B）の関係は、協力者の在籍する大学で日本語教育を行う教員 A と海外大学間協定校の教員 B である。協力者の自由な発言を妨げることがないよう、インタビューは主として教員 B が担当することとし、個人が特定されないようにすること、発言内容が在籍機関での評価や卒業に影響しないこと、途中でやめることができること等を説明し、同意を得ている[2]。

3.3. 調査方法

2023 年 4 月～2024 年 3 月までに 1 人につき、3 回、対面とオンラインで半構造化インタビューを行った。主な質問は、日本に関心を持った時期、日本語専攻を選択した理由、日本語学習過程における困難や喜び、インターンシップ参加を決めるまでの経緯、職業選択に対する意識の変容などである。その語りを本人の同意を得て録音し、逐語録化したものを分析対象とした。

［表 2］調査方法

	1 回目	2 回目	3 回目
時期	2023 年 4 月	2023 年 7 月	2024 年 3 月
場所・ツール	台湾国立 A 大学教室	Google meet	Google meet
方法	対面	オンライン	オンライン
	＊日本語と中国語による半構造化インタビュー （各 1 時間）		

なお、本研究では TEM の調査手法を用いて、協力者のライフイベントや実施可能性（協力者の都合）を考慮し、3 回のインタビューを実施し、その経路を精緻に確認し分析が行われる。初回の主な質問は上述の通りであるが、2 回目以降は、前回のインタビュー内容をまとめ、それを確認するとともに、さらに補完するための質問等を追加する。

3.4. 分析方法

データの分析には複線径路・等至性モデル（Trajectory Equifinality Model : 以下 TEM とすることがある）を用いることとした。TEM において、個人の経験を TEM の概念ツールを用いて記述する。概念ツールは、不可逆的な時間の流れにおいて、個人の状態、内的状態、環境要因、社会と個人といった関係を可視化するために用いられる。日本語教育においては、日本語教師のキャリア支援について、TEM を用いた研究が注目されているが、本研究では、日本語学習者のキャリア支援のために TEM を用いる。これにより、学習者の文化的背景、社会的背景やライフイベントが職業選択に与える影響を明らかにすることができると考える。

まず、調査協力者 3 名について、個別の TEM 図を作成した。その後、それらを統合し、1 つの TEM 図を作成し、インターンシップに参加した学生の意思決定のプロセスを可視化することを試みた。本研究における主な TEM の概念ツールの具体的な内容は 1)～3）の通りである[3]。

1) 等至点（EFP）:

本研究の目的の核心となる「日本でのインターンシップに参加する」ことが等至点となった。そして、両極化した等至点として、「日本でインターンシップしない」とした。2 つ目の等至点（2nd-EFP）は、「日本での就職を決める」こととし、両極化した等至点として「日本で就職しない」とした。

2) 必須通過点（OPP）:

3 名の協力者に共通する「(高校の）日本語科進学」、「(大学の）日本語学科進学」、「(日本での）インターンシップ終了・帰国」することとした。

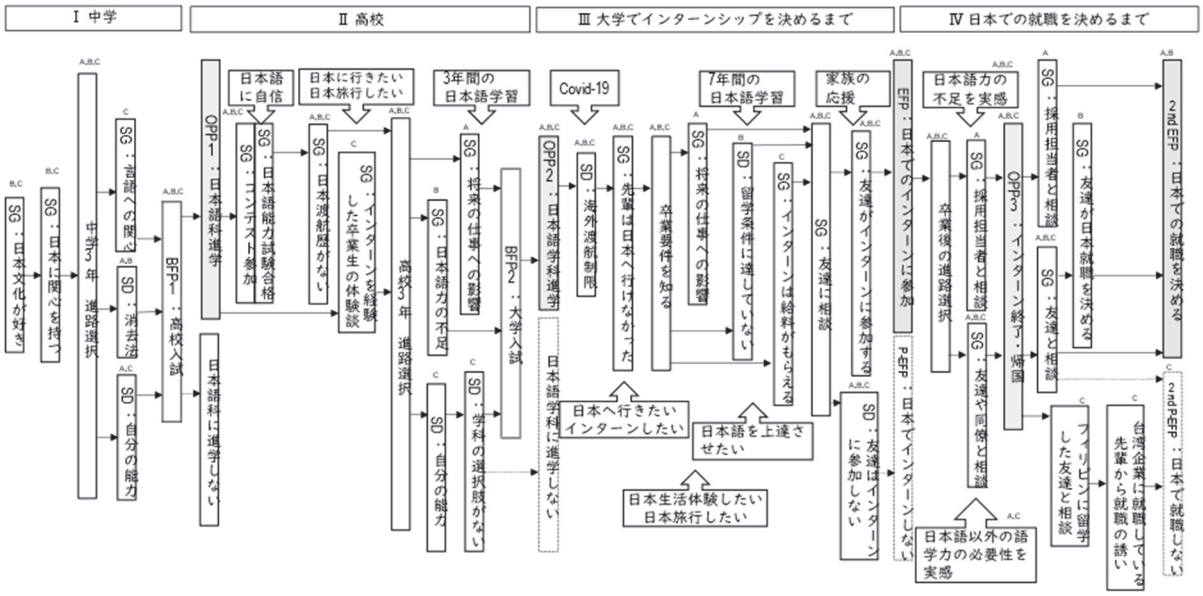
3) 分岐点（BFP）:

3 名の協力者に共通する分岐点は、「高校入試」と「大学入試」であった。

4. 結果・考察

図 2 は 3 名の協力者についての TEM 図[4]である。どの協力者が経験したことかが分かるように、径路の上部に協力者を表すアルファベットを併記した。また、人生径路を区分するような画期的な出来事として、分岐点を中心に第Ⅰ期～第Ⅳ期を時期区分とした。ここでは、必須通過点や分岐点を経て、どのように等至点に至ったかを時系列で分析・考察したい。

［図 2］TEM 図



［第Ⅰ期 中学］

第Ⅰ期は、高校で日本語学科を選択するまでの期間である。中学3年で高校での専門を決める分岐点が訪れる。高校での進路選択に際して、言語に関心があった（C）というものを除き、消去法（A、B）、あるいは、自分の能力に相応な選択肢は限られていた（A、C）というように、比較的消極的な選択により日本語科への進学することを決めている。

［第Ⅱ期 高校］

第Ⅱ期は、高校で日本語科へ進学後、大学入試を経て、大学へ進学するまでの期間である。日本語プレゼンテーションコンテスト、日本語朗読コンテスト等、日本語を使ったコンテストに参加したり（A、B、C）、日本語能力試験に合格したり（A、B、C）する中で、自身の日本語力に自信を持っていたと話している。他方で、3 名とも日本渡航経験がなかったことから、日本にあこがれ、日本へ行ってみたいと思い始めている。先輩が大学進学後、日本でインターンシップをしたという経験談を聞いて、その思いを強めている人（C）もいた。

高校3年生で進路選択をする時期になると、日台の関係を勘案して、「日本語ができれば仕事が探しやすい」というように将来の仕事への影響を考えたり（A）、日本のアニメや漫画を見ても理解できないことから自身の日本語力の不足を感じたり（B）、自身の能力や台湾の教育制度上、他に選択肢がなかったり（C）という理由で、大学でも日本語を専攻することを選択している。一見すると消極的な選択にも見えるが、いずれも「3 年間も日本語を学んだのだから」という気持ちがベースにあり、日本語学習に費やした時間に対して、相応の成果を得たいといった前向きな選択でもあるように話されていた。

［第Ⅲ期 大学でインターンシップを決めるまで］

第Ⅲ期は、大学でインターンシップを決めるまでの期間である。協力者が大学に入学したのは、折しも Covid-19 感染拡大により、海外渡航制限がかかった時期であり、先輩学生の日本留学も日本でのインターンシップも交流活動もすべて中止となってしまったのを目の当たりにしている。他方で、大学入学後に、卒業要件として、日本留学、日本でのインターンシップ、プロジェクトワークによる成果発表等の選択肢があることを知る。クラスメートたちと、どれを選択するかを相談している過程で、Covid-19 感染拡大による渡航制限が解除され、日本渡航が可能となった。先輩学生の日本渡航が叶わなかったことから、日本渡航に対する希望が高まっていたところ、将来の仕事への影響（A）、インターンシップは給料がもらえること（C）、日本留学基準は満たしていなかったが、インターンシップの基準は満たしていたこと（B）というように比較的現実的な条件が、日本へのインターンシップ参加を後押ししている。A に関しては、高校卒業時から一貫して、将来への仕事への影響を考えている。その A の決断は、他の 2 名にも影響を与え、最終的に 3 名は「友達がインターンに参加する」ことから、等至点「日本でのインターンシップに参加する」ことを選択している。そこには、大学進学時と同様に、「7 年間も日本語を学んでいるのだから」という気持ちがベースにあったことが語られている。

日本語能力に関しては、3 名とも日本語力には問題がない、自信を持っていたと話し

ている。3 名の協力者が在籍する大学の日本語専攻では、高校から日本語学習を開始し、ある程度の日本語力を有する学生と、大学から日本語学習を開始するいわゆるゼロレベルの学生が混在しており、レベルによりクラス分けされ日本語を学習する。大学入学時にすでに 3 年間の日本語学習経験を有していた協力者たちは、大学進学後、順調に日本語力を伸ばしていたことがうかがえる。

［第Ⅳ期　日本での就職を決めるまで］

第Ⅳ期は、日本での就職を決めるまでの期間である。インターンシップ中には、自身の日本語力の不足を実感したり（A、B、C）、アルバイトとは違う社会人としての経験不足を感じたり（A、B）していた。

日本語力について、勤務初日に簡単な自己紹介すらうまくできず、自身の日本語力の不足を実感したり（B）、自分の考えを日本語で伝えることができないと感じたりと（B、C）、3 名とも自身の日本語力の不足を実感していた。最終的には、簡単な事柄は日本語ネイティブのように話せるようになった（A）、同僚と冗談が言えるようになった（B）、思考も日本語になった（C）というように、向上も見られたものの、3 名とも短期間の日本滞在では、会話力の向上が十分ではなかったと話している。

また、台湾とは異なる働き方や人間関係にも戸惑ったが、たとえば、日本人的な思考の仕方や物事をはっきり言わない傾向、上下親疎関係の把握などが挙げられている。3 人が自分たちの母語でそのことを共有したり、相談したりすることで解決していたことは非常に興味深い。特に A は、インターンシップに参加したことで、他人の考えを知ることの大切さや人との付き合い方を学んだこと、すべて自分で選択することや善悪の判断をすることを通して、自立できたと話している。

インターンシップを終え、台湾に戻ると、卒業、就職が待っていることから、3 名の関心事は卒業後の進路に向かう。日本滞在中にインターンシップ先の採用担当者と積極的に就職について相談した人（A）、インターンシップ先の日本人の同僚に相談した人（C）、一緒にインターンシップに行った友人と相談した人（A、B、C）と、それぞれに考え、それぞれのアクションを起こしていた。まず、積極的にインターンシップ先の採用担当者と相談した A は、採用プロセスや必要な手続き等の情報をインターンシップ期間中に得ていた。それを他の 2 人にも共有している。そのことを見ていた B は強く影響を受け、次第に日本就職を前向きに考えるようになったと話している。C はそれとは別に、オーストラリアでのワーキングホリデー経験を有する日本人の同僚に相談し、日本語だけでなく英語の必要性を強く感じている。A も同様にインターンシップ中に日本語だけでなく、英語の必要性を実感したことを語っている。

インターンシップ終了後、A はインターンシップ先企業の採用担当者と連絡を取り続け、いち早くインターンシップ先に就職するという意思を固めている。その要因は、インターンシップ先での人間関係が構築できていることにあると話している。B は、A が日本での就職を決めたことで、自身も日本で就職することを選択する。A と B はもともとクラスメートではあったが、インターンシップを通じて、徐々に友人関係を構築し、

そのことが日本での就職を選択することに少なからぬ影響を与えていると語っている。C は、自身の語学センスを認識しており、中国語、日本語に加え、英語ができるようになれば、将来の選択肢が増えると考え、フィリピン留学を経験した友人に進路について相談していた。折しも、台湾の IT 企業に就職していた先輩学生から誘いを受け、まず、台湾で留学費用を貯め、2 年後に英語学習のため短期留学し、将来的には日本で就職することを目標にしていると話す。

5. まとめと今後の課題

本研究では、台湾人日本語学習者が日本でのインターンシップ参加や日本での就職を決定するプロセスについて TEM を用いて分析することを試みた。TEM を用いて分析することで、台湾人日本語学習者がどのように日本語学習や日本での長期滞在、日本での就職を選択するのか、要因とその関係性を時系列で明らかにすることができた。

TEM による分析で明らかになったキャリア選択に影響を与えた点は、以下の 3 点である。

1 つ目に、調査協力者の 3 名は、いずれも高校進学時に消極的な理由から日本語を選択しながらも、長期間にわたる日本語学習を通じて、日本に長期滞在し、日本の生活や日本文化を体験したいという意欲に変容し、日本でのインターンシップ参加を選択し、ひいては日本で就職することを選択していることである。

2 つ目に、インターンシップ前には、ある程度日本語力に自信があったが、インターンシップ中に日本語力の不足を感じ、さらに日本語を学ぶ必要性を感じていることである。

3 つ目に、もともとは友人関係にはなかった 3 名が、日本滞在中に母語で相談したり、問題を解決したりする中で、友人関係を構築し、日本で就職するという選択に至っていることである。

日本でのインターンシップは、国内で行われるインターンシップと異なり、文化の違いから生じる職業観や働き方の違い、学生と社会人という立場による違い等、多くのハードルを乗り越えなければならない。日本では、必ずしも海外からのインターンシップ生に寄り添った受入れ体制や教育体制が準備されているわけでもなければ、現地で良好な人間関係が構築できることが保証されているわけではない。むしろ、先行研究にも指摘されるように、厳しい状況に置かれることのほうが多いかもしれない。また、教育目的を重視する台湾の送り出し側と、就職・採用目的を中心とする日本の企業側の思惑の一致や双方の体制の標準化はこの先も期待できないだろう。そういった意味で、台湾の同じ大学からの友人の支えが日本でのインターンシップを成功させ、日本での就職へのきっかけとなっていることを確認できたことは、大変興味深い。

本研究においては、日本滞在中に、具体的にどのような問題をどのようにして解決したのか、また、どのようにして信頼関係を構築し、友人関係が築かれ、日本で就職する

と決めるに至ったのかという課題も残されている。

また、現在、日本でのインターンシッププログラムに参加する学生への調査と並行して、日本留学をした台湾人学生についても調査を行っている。今後は、日本でのプログラム経験学生の日本語習得プロセスやキャリア形成に及ぼす影響についても分析と考察を進め、日本語教育が貢献できる可能性について検討を続けていきたい。

注

1 高級職業学校は著者が文科省（2017）の図に追加した。

2 協力者全員が教員 A による講義を受けた者であり、調査開始時点において、協力者の所属大学での評価や日本でのインターンシップや卒業審査等に影響を与えると思われることも予想された。インタビューに際して、本調査は所属大学での評価に関係ないこと、また本人の発話内容のいかんを問わず、それに影響することがないことを確認すると同時に、調査協力者に安堵感を与え、余計な要素を取り払うために、インタビュアーを教員 B とした。

3 上川他（2023）によれば、各用語の説明は以下のとおりである。

1) 等至点：ある行動や選択を焦点化するポイントのこと。
2) 必須通過点：等至点を経験した人のうち「通常ほとんどの人」がある状況に至るうえで必ず通る者、また制度・法律・慣習など文化的・社会的・現実的な制約の有り様とそれをもたらす諸力を見つける手掛かりになるポイントのこと。
3) 分岐点：文化的・社会的な制約と可能性の下で実現される意思や葛藤・迷いを含む個別多様な歩みを複数に分かつポイントのこと。

4 図中に用いている基本概念は、上川他（2023）を参考に以下を用いた。

SD：社会的方向付け（等至点に向かう個人の行動や選択に制約的・疎外的な影響を及ぼす諸力）

SG：社会的助勢（等至点に向かう有り様を促したり、助けたりする力を象徴的に表した諸力）

参考文献

王珮瑜(2019)「日本への海外インターンシップについての実態と課題－台湾長栄大学応用日本語学科の事例に基づいて」『やまぐち地域社会研究』17 号、pp.57-74

大重康雄(2019)「中華民国(台湾)高等教育機関におけるインターンシップ実施状況の研究 －樹人医護管理専科学校の協力を得て」『鹿児島女子短期大学紀要』第 56 号、pp.27-36

株式会社 DISCO キャリタスリサーチ(2024)「2025 年卒 外国人留学生の就職活動状況に関する調査」（https://www.career-tasu.co.jp/wp/wp-content/uploads/2024/08/gaikokujinryugakusei_202408.pdf）2025 年 2 月 1 日閲覧

上川多恵子・宮下太陽・伊藤美智子・小澤伊久美編著、サトウタツヤ・安田裕子監修(2023)『カタログ TEA－図で響きあう』新曜社、pp.5-10

紙矢健治(2007)「台湾の職業系大学におけるインターンシップ教育の現状～観光系教育機関サンドイッチ教学」『産業教育学研究』37 巻 1 号 pp.63-70

亀野淳(2021)「日本における大学生のインターンシップの歴史的背景や近年の変化とその課題-「教育

目的」と「就職・採用目的」の視点」『日本労働研究雑誌』No.733、pp.4-15
国際交流基金ウエブサイト「海外の日本語教育の現状: 日本語教育機関調査」
（https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/survey21.html）2025 年 2 月 1 日閲覧
坂本裕子・郭碧蘭（2023）「日本語教育におけるインターンシップの重要性と課題」台湾日本語文学会国際シンポジウム発表論集『2023 年度台湾日本語・日本文学研究国際学術シンポジウムー国際教育としての台湾日本語文研究のブレイクスルーー』pp.118 -125
サトウタツヤ(2019)「序章　質的研究法を理解する枠組みの提案」『質的研究法マッピングー特徴をつかみ、活用するために』、サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真美編、新曜社、p.3
台湾教育部国際及び両岸教育司ウエブサイト「世界各主要国家の留学生人数統計」
（ https://depart.moe.edu.tw/ED2500/News_Content.aspx?n=2D25F01E87D6EE17&sms=4061A6357922F45A&s=DC0431EC04B87EDF）2025 年 2 月 1 日閲覧
戸川美恵子・内山和也(2019)「日本への海外インターンシップの現状と課題～日本語教育の視点から～」『別府大学日本語教育研究』9、pp.13-19
戸川美恵子(2020)「日本への海外インターンシップの現状についての インタビュー調査」『別府大学日本語教育研究』10、pp.41-48
安田裕子・サトウタツヤ(2012)『TEM でわかる人生の経路ー質的研究の新展開』誠信書房
文部科学省（2017）「世界の学校体系ーアジアー台湾」
（https://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/__icsFiles/afieldfile/2017/10/02/1396848_008.pdf）2024 年 11 月 22 日閲覧
文部科学省（2023）「令和 3 年度大学・短期大学・高等専門学校におけるインターンシップの実施状況について」（https://www.mext.go.jp/b_menu/internship/1413929_00003.htm）2024 年 11 月 22 日閲覧

執筆者紹介
氏名：坂本裕子
所属：室蘭工業大学大学院ひと文化系領域
Email：sakamoto@muroran-it.ac.jp

氏名：郭碧蘭
所属：台湾国立屏東大学応用日本語学科
Email：kaku@mail.nptu.edu.tw